

母子相互作用の成立とその評価

— 母子の早期接触, 育児指導の重要性 —

南部春生・卯月勝弥・沢田博行

福山桂子・富田 齊

(聖母会天使病院小児科)

はじめに

妊娠・分娩・産褥, その後の乳健に際し, 医師その他のスタッフによる時宜を得た適切な母親指導が行われることが, その後の母子の健全な行動精神運動発達に効果的に影響することはよく知られていることである。しかしこの指導の効果を定量的に知ることは困難であり, 指導者の立場からは母親による暗黙の了解を得たものとして過すことが殆んどである。

われわれは以前より妊婦母親教室の一部に携わり, 主として母子の早期接触, 母乳栄養の重要性について述べ, 又産褥退院前には児の12カ月間の発達, 栄養, 環境, 病気のしくみ, さらに睡眠・覚醒・啼泣時の関り合いをオムツ取り替え・抱き・見つめ・話しかけ・授乳に到る働きかけをいわゆる生活のリズム, state(状態)を考慮した育児指導を行ってきた(表1)が, その指導効果を得たので報告する。

研究の対象および方法

- 1) 対象, 以上に述べたような系統的な指導を受けたA群母親349人と, 任意の指導を受けたB群母親240人の計589人について, 12カ月間の育児を経験した時点でアンケートを送付し, 妊娠, 出産, 育児に関する調査を行った。
- 2) 方法, アンケートの集計は第一子, 第二子, のんびり, 神経質な母親に区分し, 有意差の検定を行ったが, 特にAB両群母親の育児安易度, 育児不安の比較, 出生直後の早期裸接触を行ったA群母親138人の育児などについて検討をすすめた。表中A1とはA群第一子を示したものである。

結 果

AB両群の母親は年令, 就業率, 喫煙率, 社会経済状態などで, その背景はおおよそ共通し, 母

乳栄養の確立は両群共に1カ月80%以上, 3カ月60~70%, 6カ月50%と高かった(表2)。

1. AB群母親の育児安易度

泣くことは大切である, 目覚めても30分は遊んでから授乳させる, 指でつまんで食べるのは平気, 歩行器は使用しない, 生後2カ月迄に児をうつ伏せ, 頭の挙上を確認する, 言葉はゆっくりと屢々かける, 目をよく見て遊んであげるなどでA群母親が有意に高い安易な育児をしており, これらは育児指導内容に重点的にもられている点である。又栄養, 睡眠, 排泄, 体重増加, 嘔吐についての不安は両群ともに第一子で有意に強く, AB群間では大きな差はなかった。

2. 早期裸接触と育児

A群138人について, de Chateauら(1977年)によって報告されたextra early nude contactを行ったが, これは正常産に際し, 臍帯切断をした児を生後15分以内に裸のまま母親の胸腹部にうつ伏せ, その後に乳頭吸啜をさせるもので, その所要時間は5分以内である。

A群施設では昭和55年7月以来この方法を実施してきたが, 当初は必ずしも産科スタッフ全員の賛同が得られなかったが, 2年後には全てのスタッフが違和感なくこれを実施するようになり現在に到っている。

(1)母親の感想: この方法を母親がどのように受け止めるかに危惧の念があったが, 138人の母親は感動した, うれしかったが夫々45.7%を占め, 気持が悪い1例, びっくりしたのは11例で, このことを予知されていない母親であった(表4)。

(2) 第一子extra群とhospital routine群との育児安易度, 育児不安の比較(表5): 第一子extra群54人とroutine群68人で比較検討したが, 先に述べたAB群間で有意差のあった項目に加え, 気楽に抱けた, 夜泣きはあまり心配な

かったなどで前者が有意に気楽な対応をみせ、恰も第二子を育児するに似ており、B群第一子の安易度をはるかに凌駕していた。又出産後14日以内に離床する母親が多く、実母による援助が少くなり、育児不安も有意に少い結果であった。

3. 異常出産（帝王切開第一子）の場合

出産後2-3日間の部分的母子分離を余儀なくされた帝王切開第一子出産の母親37人について同様の検討を行った。母親の退院は10~14日目となり、離床も遅れる傾向にあるが、母乳栄養の確立は正常産のそれと同率を維持していたが、育児については、目覚めた児のオムツ替えを急ぐ、指でつまんで食べるのは嫌だ、哺乳、排尿、うつ伏せの不安が強く、言葉かけは有意に少なくなり母子分離の影響が示唆された（表6）。

考 按

妊娠から育児に到る間に母親は種々の不安、期待を繰り返しながら次第に育児への心構え、自信を深めつつ母性が確立もし、時には不完全に経過してゆくものである。しかし99.6%をこえる施設分娩を考えると、この施設に入院している期間に適切な周産期指導 Perinatal coachingは欠くことの出来ない重要な意味をもっており、それは母子間の相互作用を意識した内容のものである eye to eye contact, 話しかけ、抱き、母乳栄養確立の働きかけにつさるが、特に第一子母親への配慮がその性格の如何に拘わらず大切である（表7）。

母のもつ種々の不安の中では育児についての不安が強く（第一子70%）、これが妊娠、育児知識の必要と関連し、育児のHow-toを医療関係者、マスコミを通して吸収し、母親教室の受講は実に80%にも達している（表8）。又われわれの行ってきた育児指導については第一子母親は実感を伴わない（30~40%）としながら、12カ月間の育児を通して非常に役立った（70~80%）とし

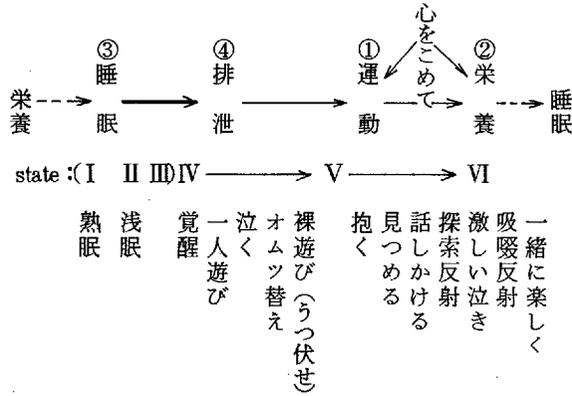
ており、周産期指導に携わるものの役割がつとに必要であることを強く示唆するものである。指導の内容については前述したごとくであるが、特に児のstate（状態）と母子相互作用を深慮した関わり合いをすることの重要性が今後益々問われることになるであろう。又医療スタッフの母子への関わり合い、援助については母子同質性、異室性によって異ってくるが、今回のアンケートをみても30%の母親が赤ちゃんとの接触をもっと長くしてほしいと望み、10%の母親がスタッフの対応に不満を抱き、20%の母親は母子同室性と当然としながら、50%の母親は出産は疲れるので異室性が良いと答えており、母子の早期接触、その後の継続接触、他方母子分離の場合をも包含し、現在の母親との対応の難しさを感じさせるが、目下は母子異室性を採用しているAB両施設の今後の重要な検討課題である。

それにしても早期の母子接触が母親をして気楽な育児行動を誘き出す効果を得たことはde Chatteauらの成績の強い裏付けとなったが、母性の確立を適確に高める方法としてこれに優るものはなく、特に出産後の最興奮期にある母親と覚醒・活動期にある児が接触することは、その後のあらゆる母子の接触に優るとするKlausらの記述に注目すべきであり、逆にこの機会を失した母子の取り扱い、援助の重要性にもつながることである。

おわりに

周産期周辺における母親指導、特に母子相互作用にみる、見つめ・話しかけ・抱き上げ・授乳の関わり合いを児のstate（状態）を考慮した、いわゆる生活のリズムとして行うことが、母親の育児安易度を高め、育児不安を減少せしめる結果を得た。又母子の早期接触が、これらの効果をさらに高めることを知り、周産期の医療に携わる関係者の役割・援助の重要性を強調した。

表1. 生活のリズム



ねつきが悪い, 夜 夜尿, 遺糞どもり, チック 拒食・過食
 驚, 夢, 夢中遊行 昼間遺尿 指しゃぶり 空気嚥下, 異食

表2. 母乳の確立

性 格	の ん び り					神 経 質				
	A 1 n=80	A 2 n=98	A1vA2 P	B 1 n=75	A1vB1 P	A 1 n=67	A 2 n=104	A1vA2 P	B 1 n=72	A1vB1 P
母乳で育った	83%	81		73		87	84		71	※
母乳で育てる	99	97		96		98	95		97	
全く飲ませない	1	1		9		6	4		6	
1 カ 月	86	88		81		82	88		87	
3 カ 月	70	66	+	69		71	70		74	
6 カ 月	51	39		47		41	49		55	
12カ月以上	19	11		17		13	8		15	
母乳マッサージ	96	79		92		94	91		93	
安心だった	48	62	※	59		52	69		58	

※ < 0.05, + < 0.1

表3. 育児安易度

出生順位 性 格	第 1 子					第 2 子						
	のんびり		P	神経質		P	のんびり		P	神経質		P
	A n 80	B n 73		A n 67	B n 72		A n 98	B n 41		A n 104	B n 52	
気楽に抱く	35%	40		33	22		84	76		82	87	
おむつ替え当然	94	96		97	90		96	98		93	88	
授乳当然	99	99		95	97		99	98		96	98	
泣くこと大切	80	63	※	67	64		88	75	※	84	80	
目覚め30分は遊ぶ	34	19	※※	37	19	※※	34	20	※	38	37	
くしゃみ平気	23	28		30	38		41	29	+	42	28	※
指つまみ平気	80	71	※	76	69		82	71	+	77	71	
歩行器使用せず	65	58		73	66		70	56	※	69	54	※
うつ伏せ泣き様子を見る	39	29	+	28	46	※	43	37		39	40	
うつ伏せ0~2カ月	65	47	※※	43	17	※	55	34	※※	37	12	※※
夜泣き困る	43	44		40	49		22	32	+	31	42	+
言葉をゆっくり時々かける	65	49	※	61	41	※※	51	46		45	54	
目を見て遊ぶ	82	72	※	78	79		69	63		75	69	
入院する病気なし	84	81		81	82		81	80		71	77	
生後12カ月心配なし	18	13		12	7		32	15	※	24	21	

※※<0.01, ※<0.05, +<0.1

表4. extra contact[※]と母の感想

出生順位 群	第 1 子		第 2 子		計 n=138
	のんびり n=30	神経質 n=24	のんびり n=39	神経質 n=45	
感動した	15 (50.0%)	12 (50.0%)	14 (35.9%)	22 (48.9%)	63 (45.7%)
うれしい	13 (43.3%)	8 (33.3%)	23 (59.0%)	19 (42.2%)	63 (45.7%)
気持悪い		1 (4.2%)			1 (0.7%)
びっくり	2 (6.7%)	3 (12.5%)	2 (5.1%)	4 (8.9%)	11 (7.9%)

※A群349例中138例(39.5%)
 出生後15分以内母と子の裸の接触とその後の乳頭吸啜

表5. extra contact と育児安易度 (第1子)

性 格 群	A のんびり			A 神経質			B	
	Ext. n=30	R. n=39	P	Ext. n=24	R. n=29	P	のんびり n=60	神経質 n=66
安 産	93	100		100	100		100	100
気 楽 に 抱 く	40	28	※	29	31		32	33
おむつ取替え当然	93	90		100	92		92	96
授 乳 当 然	100	98		100	98		97	96
泣くこと大切	87	74	※	66	65		60	64
目覚め, 30分は遊ぶ	37	28	+	38	34		19	18
くしゃみ平気	23	20		25	22		25	30
指つまみ平気	83	74	+	75	75		70	65
歩行器使わず	80	55	※※	71	75		56	66
うつ伏せ泣き様子をみる	43	35	+	29	25		29	35
うつ伏せ0~2カ月	87	63	※	87	48	※※	47	17
夜泣き困る	37	48	+	29	47	※	46	49
言葉ゆっくり屢々	67	62		71	54	※※	49	44
目をみてよく遊ぶ	87	80		83	77		72	79
入院する病気なし	93	75	※	92	80	※	80	82
生後12カ月全く心配なし	23	13	+	8	12		13	7

※※ < 0.01, ※ < 0.05, + < 0.1

表6. 異常分娩と育児不安(第1子)

群	帝王切開 n=37	Aの n=80	A神 n=67	帝切 Aの v	帝切 A神 v
離床 14日以内	9%	17	14	※	※
22日以上	32	17	19		
援助実母	76	73	81		
姑・その他	24	27	19		
母乳確立 3カ月	68	70	71		
6カ月	41	51	41	+	
気楽に抱けない	27	21	24		
目覚め・おむつ替え急ぐ	27	8	12	※※	※
指でつまむ・いや	32	20	24	※	
のみ具合心配	41	16	31	※※	
うつ伏せ 0~2カ月	46	65	43	※	
泣くとすぐ抱く	19	21	19		
言葉はゆっくり屢々	38	65	61	※※	※※
目をみてよく遊ぶ	81	82	78		
食べない	41	35	36		
ねない	24	21	30		
排尿気になる	27	20	22		
吐く	43	42	45		

※※0.01 ※0.05 +0.1

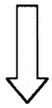
表8. 妊娠・分娩・育児知識の必要性

性 格	の ん び り					神 経 質				
	A1 n=80	A2 n=98	A1vA2 P	B1 n=75	A1vB1 P	A1 n=67	A2 n=104	A1vA2 P	B1 n=72	A1vB1 P
知識の吸収										
医師ら	46%	34	○	44	○	43	38	○	49	○
母親から	25	28		35	○	25	28		17	
友人・知人	19	21		24		25	32		35	○
マスコミ・テレビ	54	49	○	41	○	51	45	○	38	○
必要性痛感	50	51		53		52	47		55	
迷いが多くなる	3	4				6	6		3	
母親教室受講	78	40	※※	80		79	50	※※	76	

表7. 調査結果の有意差

アンケート項目	第1子294 対 第2子295	のんびり294 対 神経質295	アンケート項目	第1子294 対 第2子295	のんびり294 対 神経質295
1. 妊娠中			安心して退院	※	
母の年齢	※※	※	のみ具合心配	※※	※
夫の性格	※	※	授乳期間	※	
母の職業			育児指導受講		+
妊婦に到る年月	※※	※	指導理解度	※※	
出生の心配	※		育児効果	※※	+
育児不安	※※		赤ちゃんとの接触		
病内服			スタッフの対応		
力になる友人・知人	※		母子同室性	+	
夫の心情的協力	※※		母への援助	※	+
妊娠中の不幸	※※	+	夫の出産後協力	※	
経済的不安	+		離床日数	※※	
子どもの数	※※		3. 生後12カ月間		
男児は育てづらい			気楽に抱けた	※※	
子ども好き嫌い	※		おむつ替え・授乳	+	
喫煙			泣いた赤ちゃん	※※	
妊婦の期待	※※		目を覚ました時		
妊娠のうれしさ	※※		くしゃみ心配	※	
育児知識の吸収			つまんで食べる		
知識の必要性			歩行器		
母親教室受講	※※		果汁・離乳食		
2. 生後1週間			うつ伏せ時期	※	
出産は予定通り			うつ伏せ泣いた時		
異常分娩			夜泣きで困る	※※	
裸の赤ちゃん抱く	+		言葉かけゆっくりと	+	※
出産後疲労	※※	※	目を見て遊ぶ	+	+
夫の立会い	※※		入院する病気	※	
夫の喜び	※	※	夫の育児関心	※※	※
夫の面会	※※		夫の育児協力		
母乳で育った			食事の心配	※※	
母乳で育てる			睡眠	※	
母乳マッサージ	※		排便		
初乳分泌時間			排尿	+	+
完全母乳	+		体重増加		
退院時の母乳	+		嘔吐	※※	
			12カ月間後心配	※※	※

※※<0.01, ※<0.05 +<0.1



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

妊娠・分娩・産褥,その後の乳健に際し,医師その他のスタッフによる時宜を得た適切な母親指導が行われることが,その後の母子の健全な行動精神運動発達に効果的に影響することはよく知られていることである。しかしこの指導の効果を定量的に知ることは困難であり,指導者の立場からは母親による暗黙の了解を得たものとして過すことが殆んどである。

われわれは以前より妊婦母親教室の一部に携わり,主として母子の早期接触,母乳栄養の重要性について述べ,又産褥退院前には児の12ヵ月間の発意栄養,環境,病気のしくみ,さらには睡眠・覚醒・席泣時の関り合いをオムツ取り替え・抱き・見つめ・話しかけ・授乳に到る働きかけをいわゆる生活のリズム,state(状態)を考慮した育児指導を行ってきた(表1)が,その指導効果を得たので報告する。